伊工紛爭寫眞画報

ナポリ港出發のイタリー軍

朝日新聞社發行

伊エ兩軍の戰備

イタリー軍

東阿に動員されたイタリーの正規軍は、ペロリターナ第二十九師團、カヴイアーナ第十九師團、サヴアウダ第三十師團、グラン・サツソウ第二十四師團、シイラ第二十九師團、アシエッタ第二十六師團、コセリア第五師團、その他各種の特科部隊。義勇軍はマルツオ、オツト、ブレアブリーレ、ジエンナイオ、ヘブライオ、テベレの六個師團でエリトレアに十七萬伊領ソマリーランドに七萬、その他に勞働者達約三萬が配備されてゐる。これを兵器の方から見ると少くとも輕機關銃二千二百、機關銃一千五百、步兵砲二百五十、大小の火砲七百、飛行機六百、その他戰車多數が持込まれてゐる。

これらの大軍を統監するためムソリーニはデ・ボノ將軍を全軍總司令官に任命し、エリトレア首都マッサワにその司令本部を設置せしめるとともに、伊領ソマリーランドの司令官としてグラチアーニ將軍を任命したのである。

この外に、かつて大西洋編隊橫斷飛行に成功し雄名を馳せたイタロ・バルボ將軍——かつて航空相でもあつた——を空軍總司令としてエリトレアに派遣してゐる。

以上の堂々たる陣容を擁するイタリーは一度開戰すれば、エチオピアの有する地形及び氣候上の難關を克服して、果して如何なる作戰をとるであらう。傳へられるところによると、エリトレア國境方面については、イタリーは先づ兵を三軍に分け、三つの徑路を選んで進擊するものと思はれる。主力軍はアスマラを中心とする中央部隊で、アスマラから一氣に南下し、國境を越えてアドワ、アキスムを占領する。これと並行して兩翼部隊は、バレンツからサラコへ、またキヅリからマカレに進擊する。この陸上部隊は何れも最新武器の效果を十二分に發揮しながらアドワの雪辱を期する計畫であるが、更にこれを掩護し、敵狀を偵察するための空軍部隊には多大の期待がかけられてゐる。

現在空軍根據地はソマリーランドのモガデイシュを除く外全部エリトレアに設けられてゐる。アスマラ、ズーラ、アッサブの三根據地がそれである、それらの根據地に最近三百台增遣されたサヴオイア・マルケッチ重爆機は、發動機三基裝備、イタリー空軍の誇りとする精銳機。爆彈一千キログラムを積込んで時速三百五十キロ、航續力が二千キロといはれる。過日同機によつてローマ、マッサワ間を十一時間四十五分で踏破してゐるから、根據地から首都アヂス・アベバを空襲するのは易々たるものである。

試みにアッサでの根據地を中心として計算してみると、アヂス・アベバまで四百五十キロ、またアヂス・アベバと佛領チブチ間を結ぶ鐵道の沿線にある重要地點デイレダワまでは僅か百キロしかない。一度兩軍衝突すれば、イタリー空軍は先づデイダワを襲ひ、鐵道を遮斷することによつて、武器彈藥の輸送口を斷ち、ついでハラールを空襲することは容易であらう。しかも最初の空襲の效果如何はイタリーにとつて最も重要視されてゐる。先づ『空の艦隊』の出動によつてエチオピア國民を震慴せしめねばならないからである。

次に伊領ソマリーランド方面においては、イタリー軍は先づモガデイシュに根據をおく空軍の掩護の下に、ガルカユ、ベラ邊りから國境ジュジュブを越えてワルワル方面に進擊するであらう。

エチオピア軍

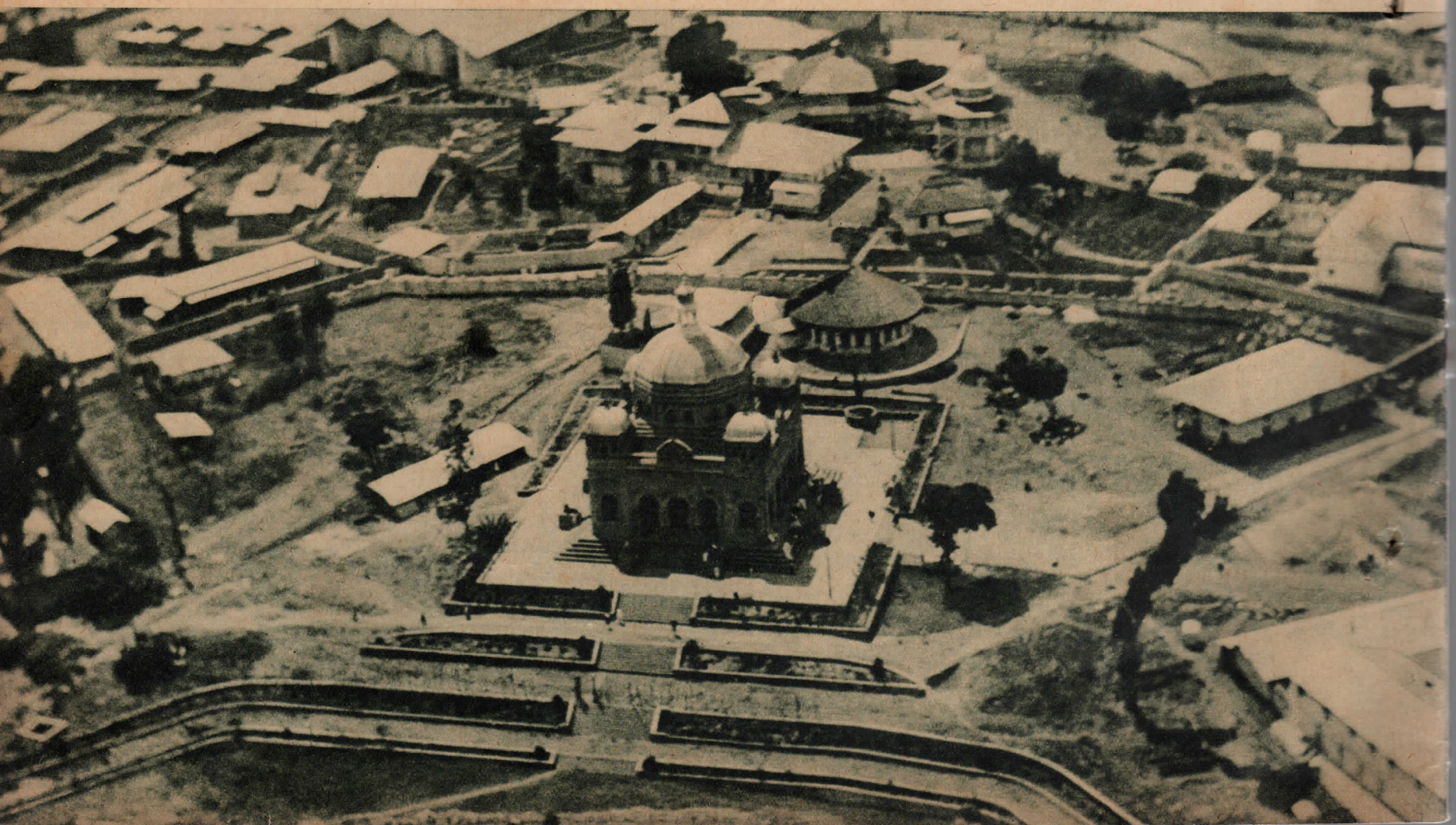
エチオピアの正規軍といへば皇帝直屬の近衞師團で、首都アヂス・アベバに步兵三個大隊、機關銃二個中隊、舊砲兵一個中隊、騎兵二個中隊二百四十騎、砲兵一分隊が駐屯し、別にアヂス・アベバの近郊デッセイにも一個大隊が常置されてゐる、約三千五百から四千名。次ぎに政府軍といつて各地に配置してゐるものが約十萬。これは志願兵と土着兵とから成り、半數は北部のショア地方に駐在し、他は步兵一大隊を基幹とする程度のものが各地に分散してゐるほか、ハラール地方には騎兵及び駱駝隊も編成されてゐる。

次に地方土豪の私兵より成る地方軍がある。大小幾多の兵團から成りその數は確實に判らない。しかし對伊戰で動員される兵數は約五十萬といはれてゐるが、近代武器を有し新式訓練を受けてゐるものは正規軍くらゐのものである。

これを兵器の方から見ると、機關銃三百乃至四百、大砲は、約二三百、しかし本當に役に立つのは五十門くらゐしかない。飛行機は多種多樣のもので戰鬪機として使用できるものは殆どなく、開戰の場合も聯絡用として使用するほかないであらう。このほか高射砲、タンクなどの新兵器を今回の事件で僅かに輸入してゐるが、イタリー側の戰備に比較すればお話にならない。

そこでエチオピア軍としても、到底集團部隊をもつて、正面から戰鬪を開始することの不利を認め、ゲリラ戰術をもつて巧に敵部隊を天嶮に誘致し、後部兵站線を遮斷して、一氣にこれを殲滅せしめんとの肚である。ゲリラ戰術とは編成された軍隊のみでなく町民、百姓などの便衣隊を使ひ、出沒自在な奇襲をもつて相手を惱ませるもので、最初エ軍當局の一部はこれに同意しなかつたが、外國顧問武官らの說得で結局この戰術を採用することに決定した模樣である。

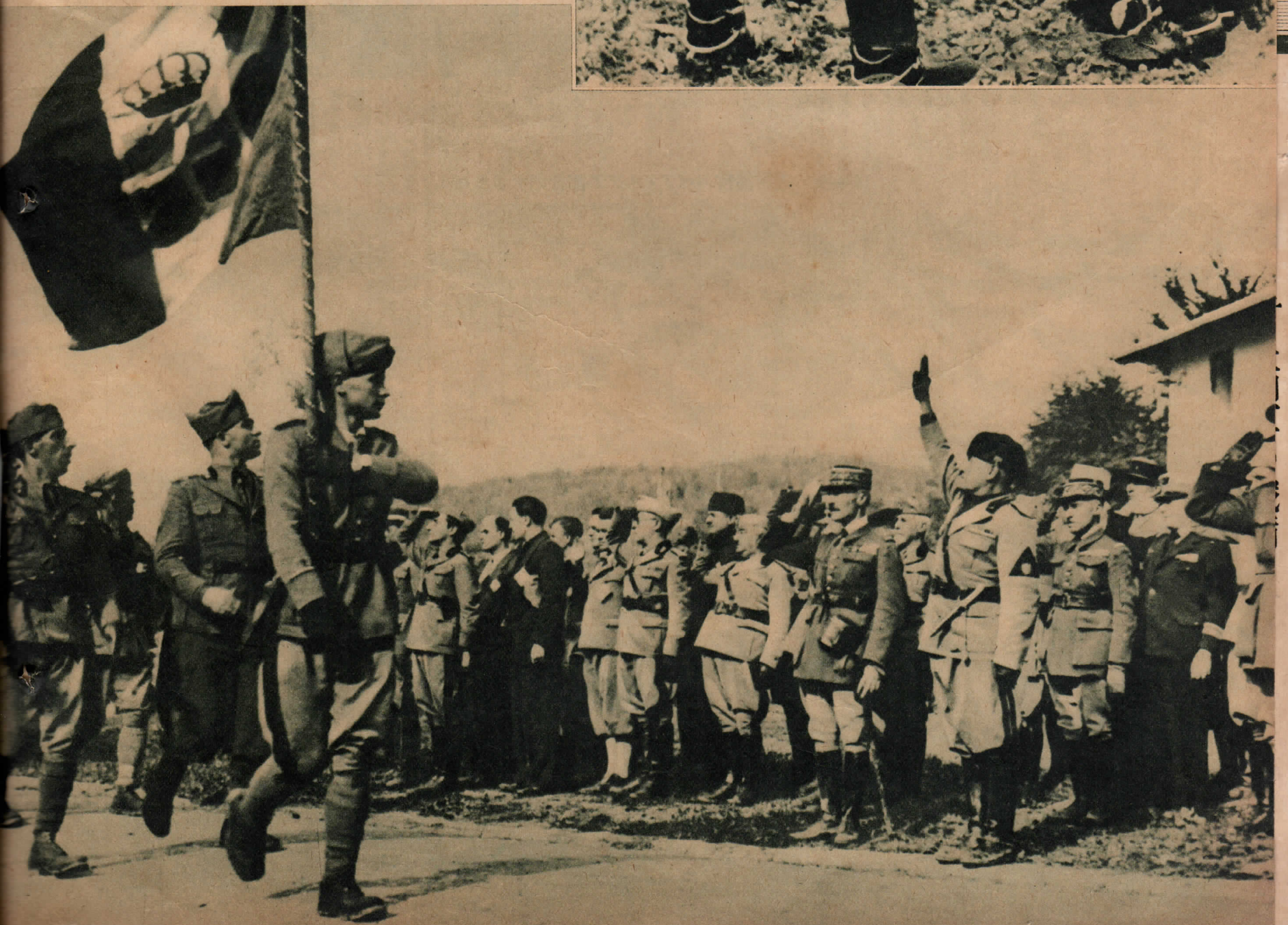
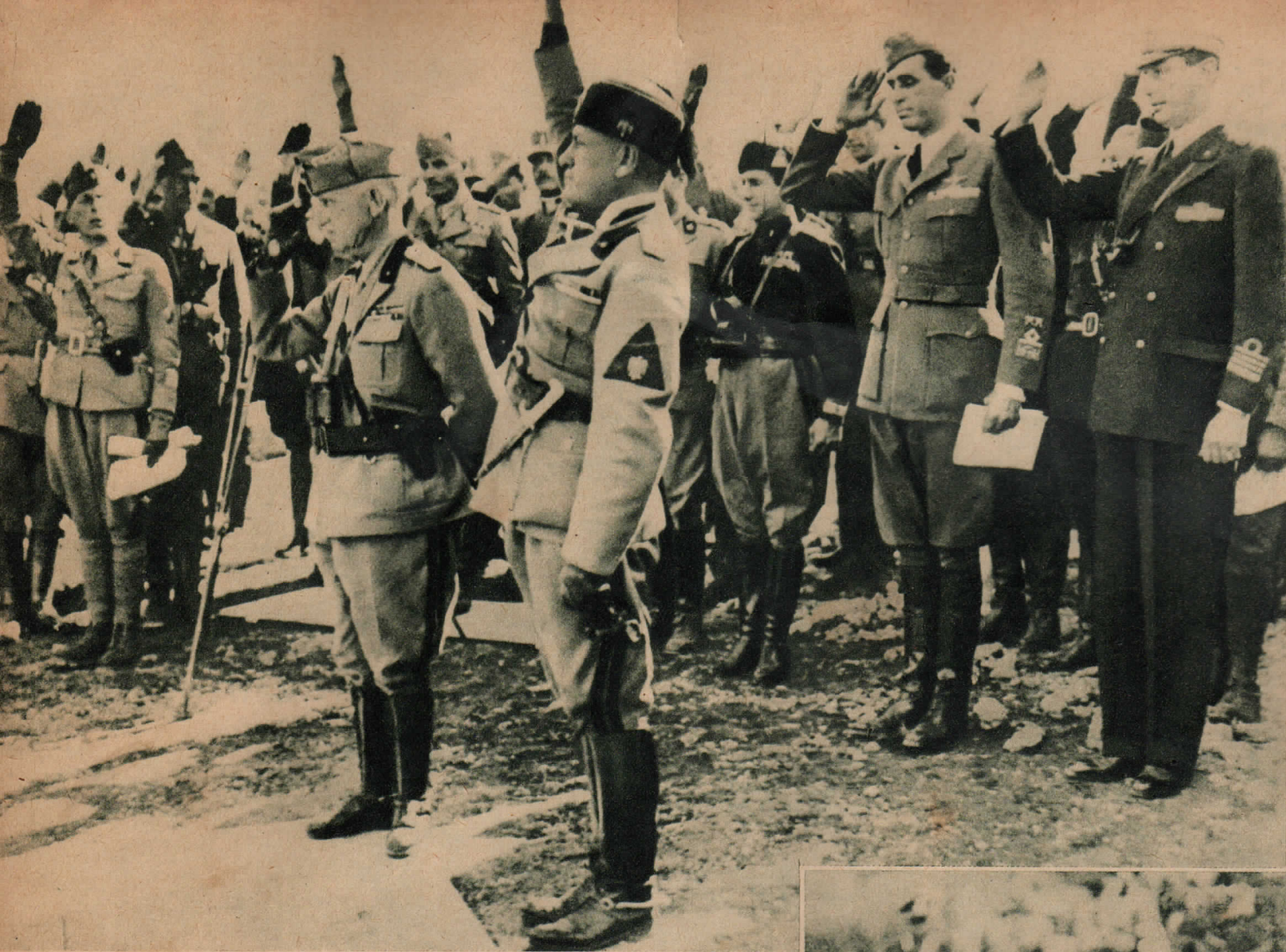
そこで軍の配備は如何? まづ最も激戰を豫想されるエリトレア國境方面を見ると、エチオピアの西部國境からデッシュ及び東部國境アウッサを結びつける線の以北に約二十八萬餘が集中されてゐる。すなはち百戰鍊磨の武功を誇り獰猛比ひなしと怖れられてゐるアウッサ長官マホメット將軍麾下の三萬五千を始め、エリトレア國境全面にわたつて嚴重な防禦陣を張り廻らしてゐる。そして空襲を避ける塹壕、不時着せる飛行機または陸上部隊の行手を妨げる陷穽などを構築する一方、敵を拜み射ち出來るやうな斷崖絕壁上に要所を澤山設け、アドワ戰の例に倣つてこれを邀擊せんと意氣込んでゐるのである。

更に伊領ソマリーランドとの國境方面は? かつてアドワに參戰した老將として國民の崇敬の的となつてゐるワロ長官ハブタ・ミカヘル將軍が去る九月三日、七百の近衞兵及び手兵一萬、鐵道沿線で合流せる直屬兵一萬、高射砲、タンク、機關銃隊等の特別部隊をも隨へてワルワル方面に急行したのを始めとしてハラール、ジジガに待機中の南部主力部隊も漸次オガデン方面に向つて移動し始めたから、こゝにエ軍全線の戰備は一通り整へられたと見てよからう。しかし地形及び氣候による自然の要砦が、果してイタリー軍の科學兵器に對抗してどの程度の助けとなるであらうか、そこにエチオピアの運命が託されてゐる。

エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ一世陛下

イタリーのムソリーニ首相

エチオピアの首都アヂス・アベバ宮殿附近（空中撮影）

イタリーの大演習

伊エ紛爭を前にしてイタリーは五十萬の精鋭を動員し八月廿五日から一週間北イタリーのボルツアノ市を中心に空前の大演習を行ふた

イタリー、ボルツアノ地方で行はれた大演習を親しく御統監あそばされるイタリー皇帝エマヌエル三世陛下(右)とムッソリーニ首相(左)

素晴らしい人氣のムッソリーニ首相

(ボルツアノ市街頭所見)

ムッソリーニ首相の部隊閲兵

(首相の周圍は觀戰の外國武官連)

大演習參加部隊に獅子吼したる後
ファシストの禮をするムソリーニ首相
(横に立たせたまふはイタリー皇帝陛下)

ムソリーニ首相熱狂的歡迎の大示威

大演習御統監の
イタリー皇帝(左)と
ムソリーニ首相

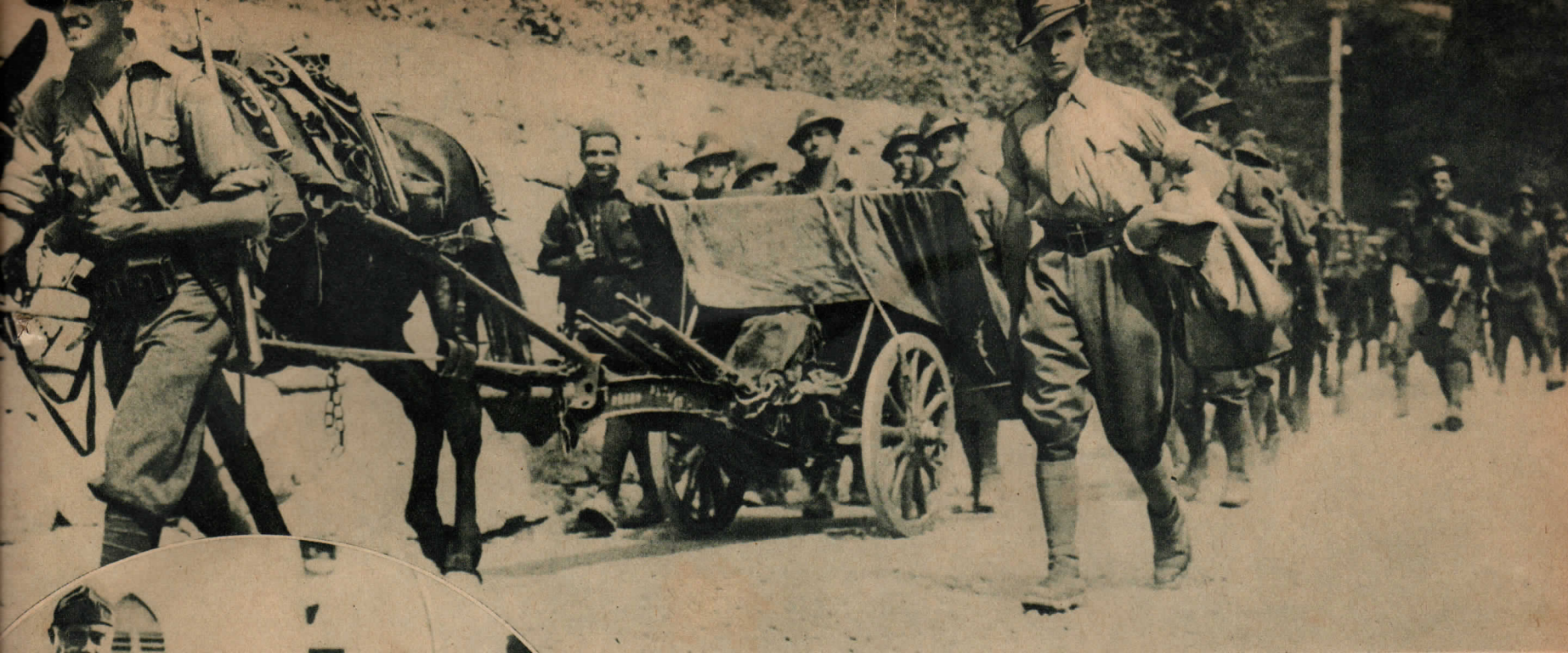
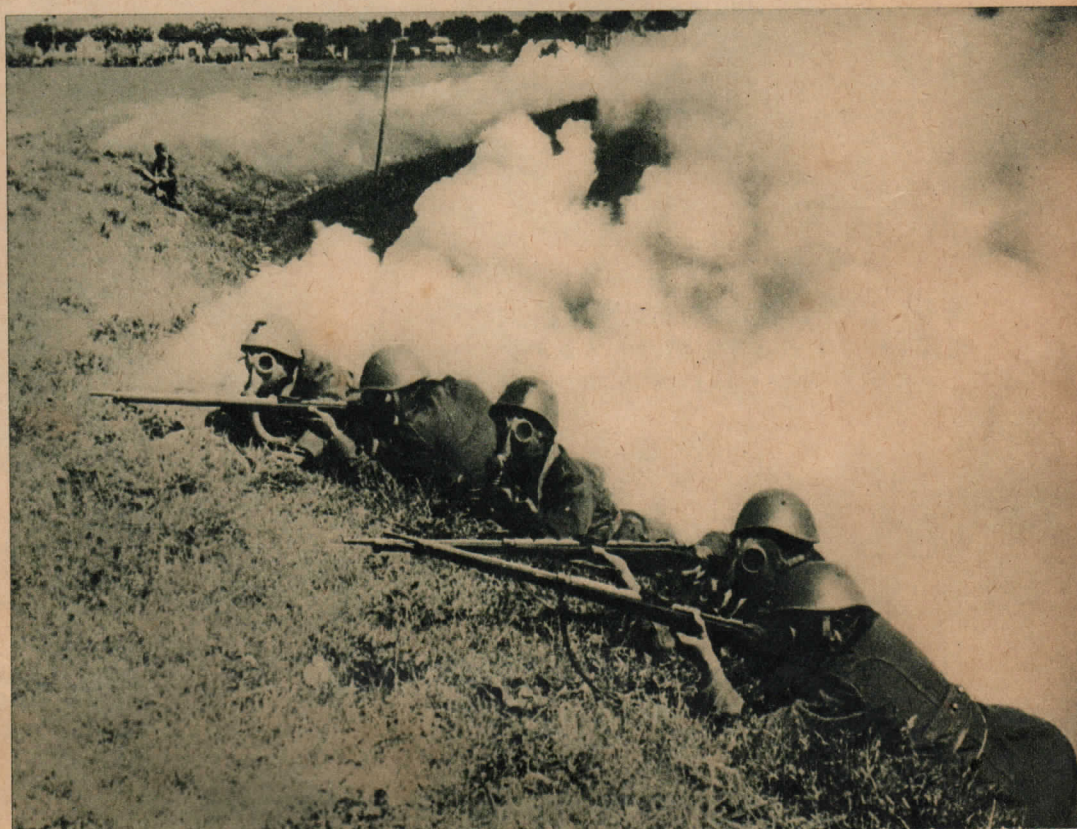
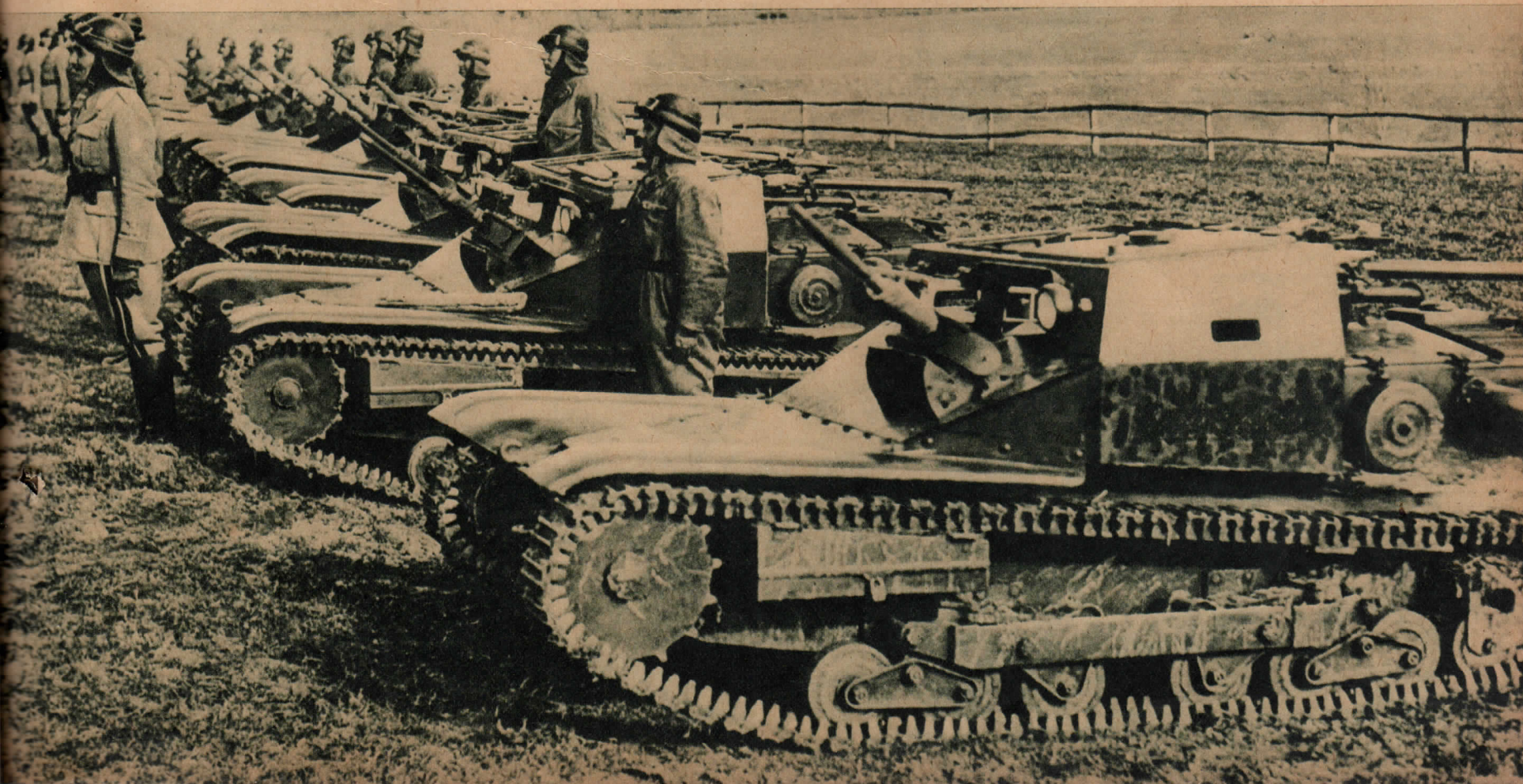
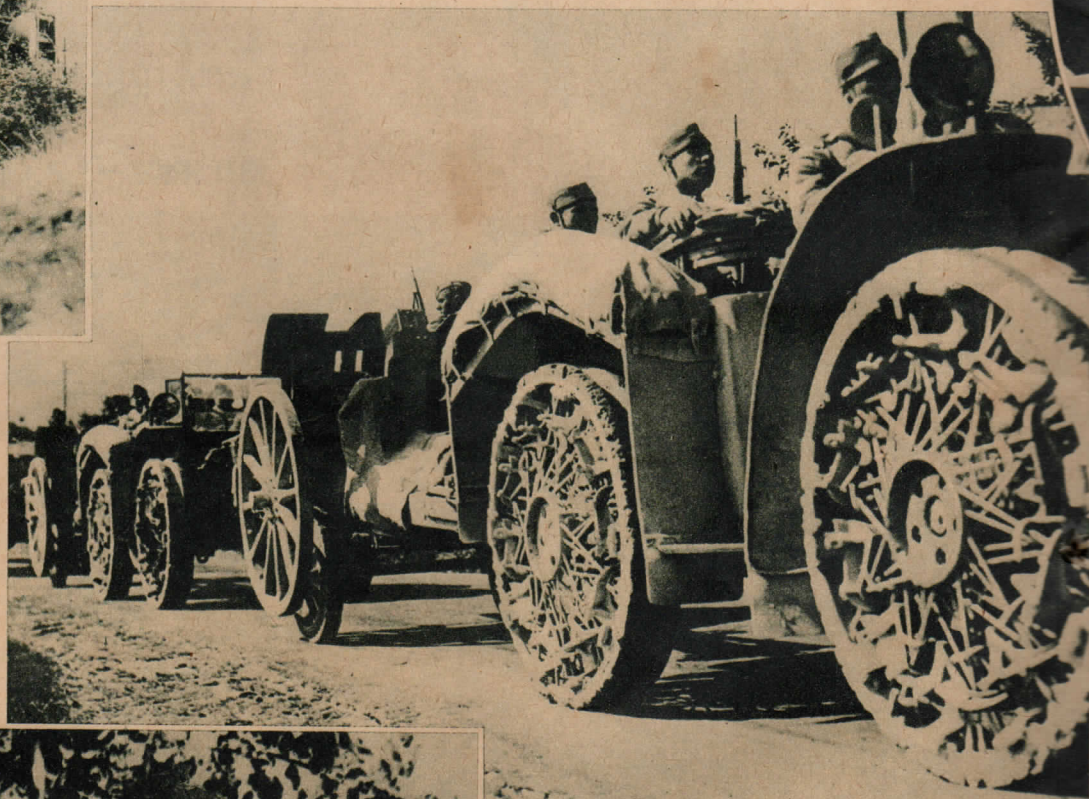
砲車の行進（イタリー・ボルツァノ大演習）

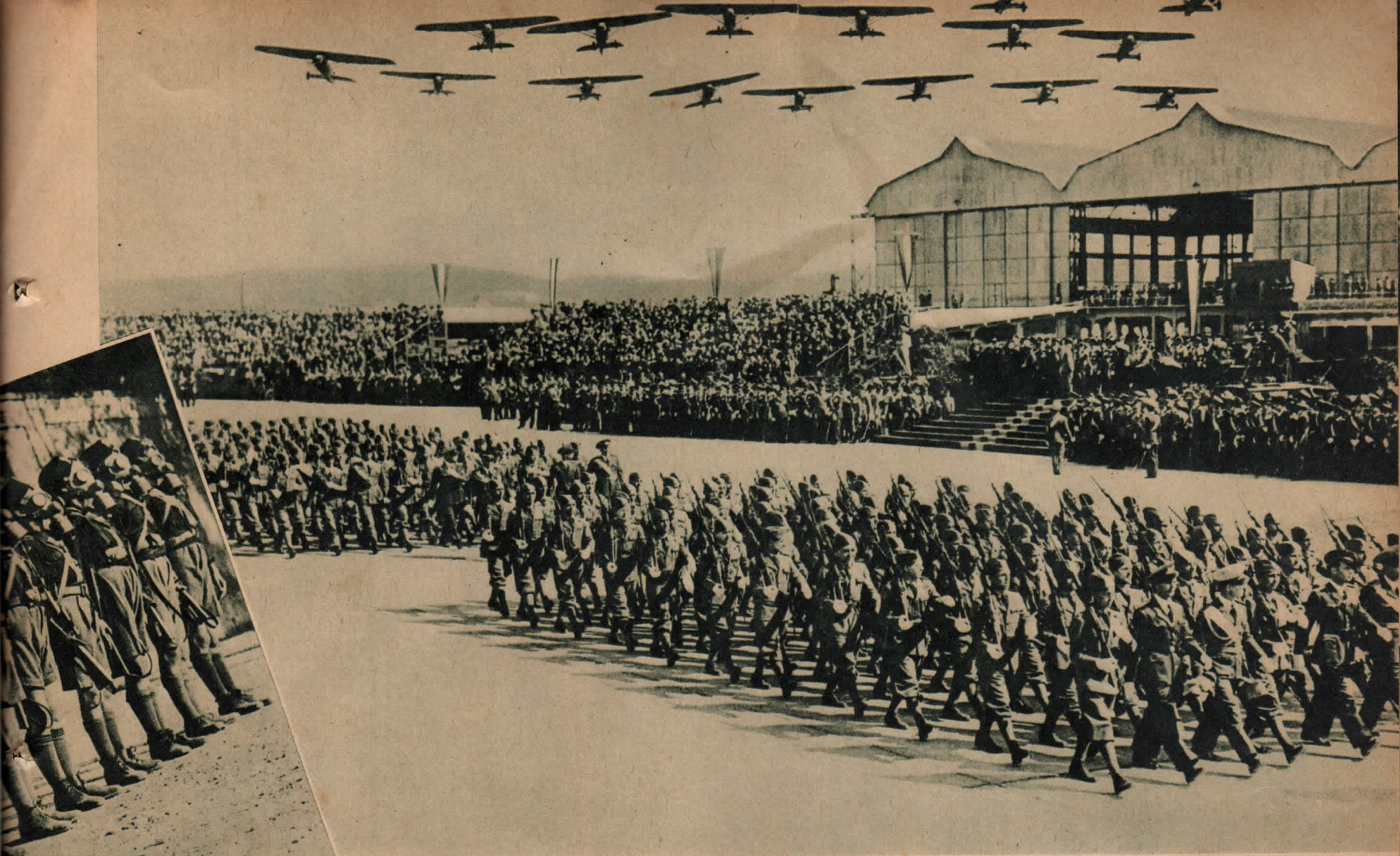
ラヂオ装置の説明をきくムソリーニ首相（ボルツァノ大演習）

毒ガス攻撃に對して（ボルツァノ大演習）

新型高射砲の發射
（ボルツアノ大演習）

カムフラージされた輸送車
（ボルツアノ大演習）

砲兵隊の活動
（ボルツアノ大演習）

機關銃の射擊
（ボルツアノ大演習）

大演習參加のタンク隊
（ボルツアノ大演習）

イタリー空軍

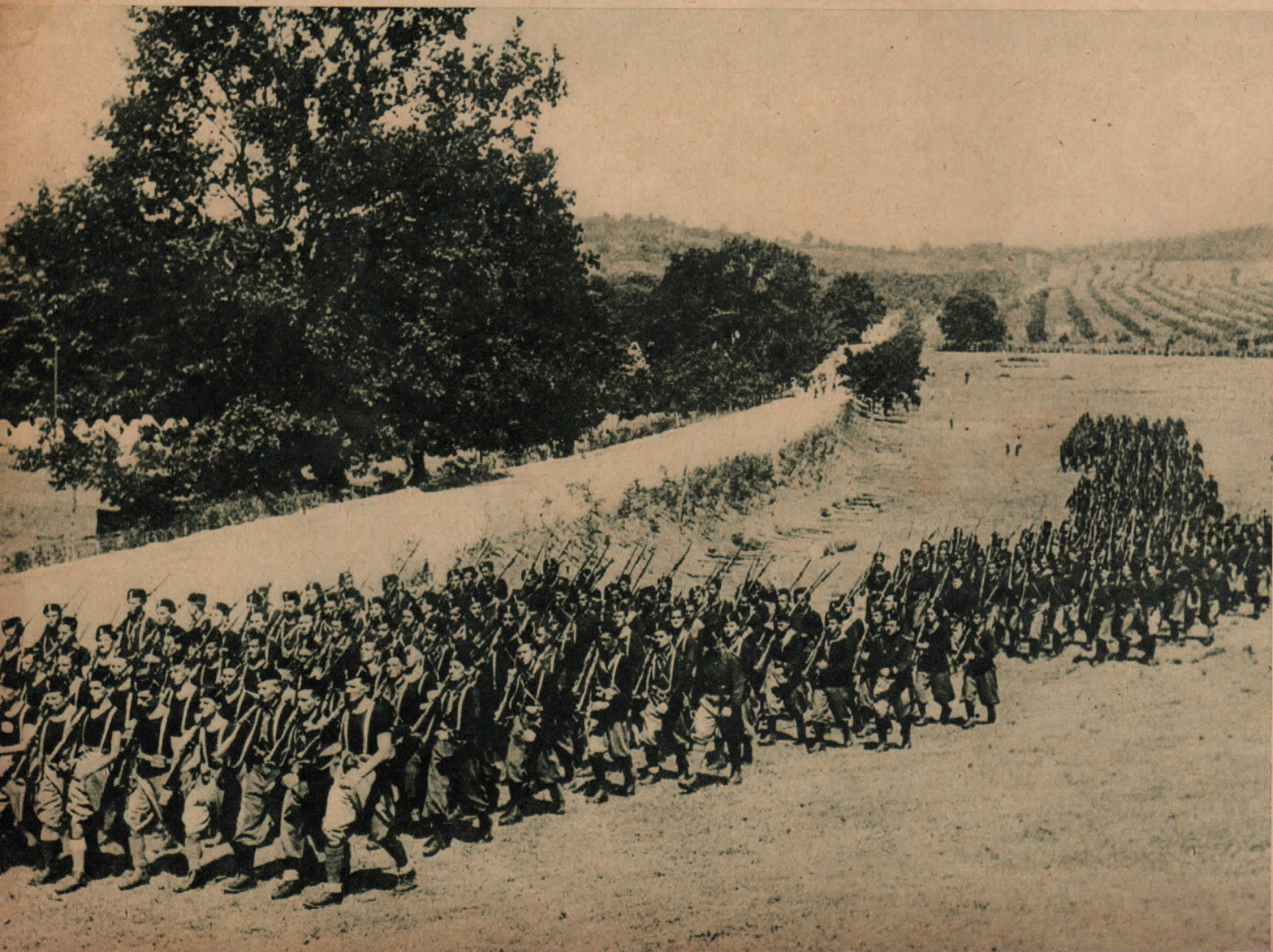
リツトリヤ飛行場で行はれた分列式

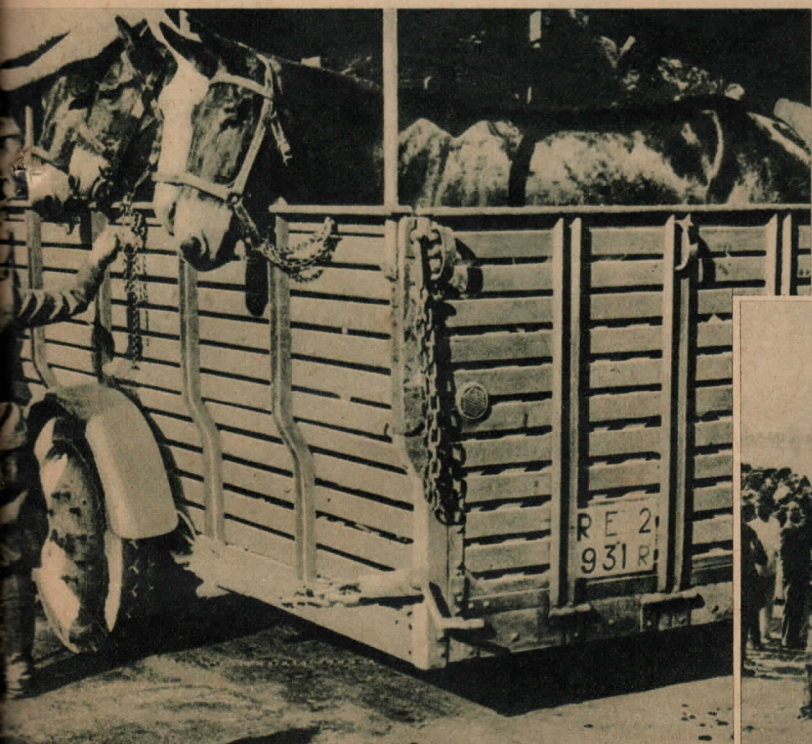
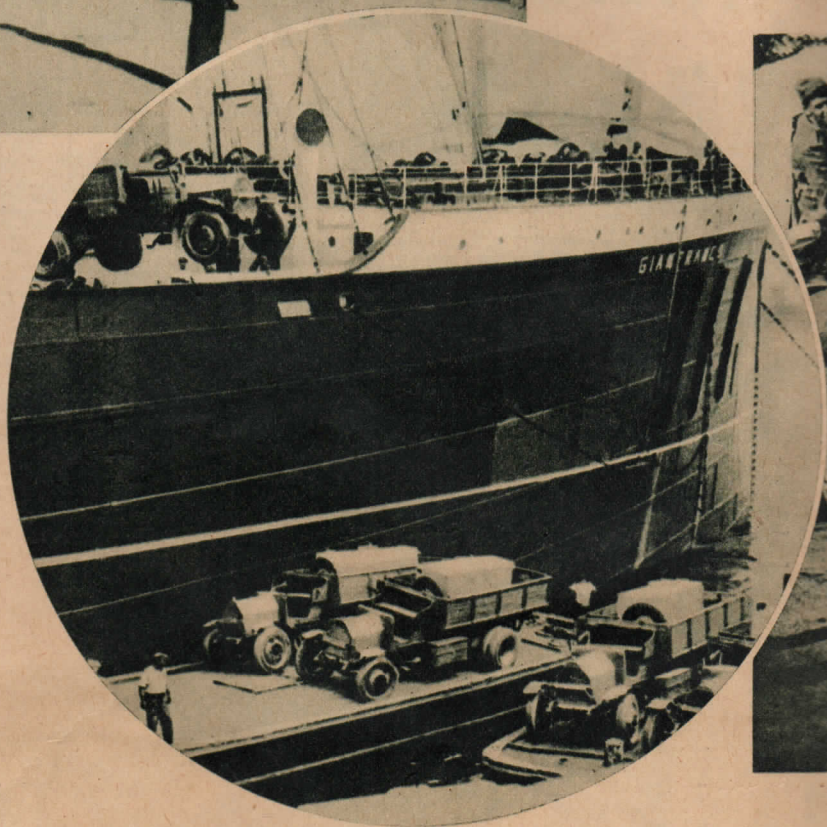
翼を並べて待機のイタリー空軍飛行機

酷暑耐久訓練

裸體行進のイタリー軍兵士たち（ローマにて）

出動を前に

『僕らも祖國のために』（イタリー、バリラ少年團のガス・マスク訓練）

出動命令を受けたファシスト隊員（ローマ附近にて）

ゼノア乗船の伊軍出發隊を
御閲兵の伊國皇太子殿下

東阿派遣部隊の閲兵を行ふムソリーニ首相

東阿出征地へ輸送の軍馬

檢閲を受けるタンク隊

〇兵と輸送

イタリー軍用機の積込み
（イタリー、ナポリ港にて）

イタリー砲兵隊の砲車積込み

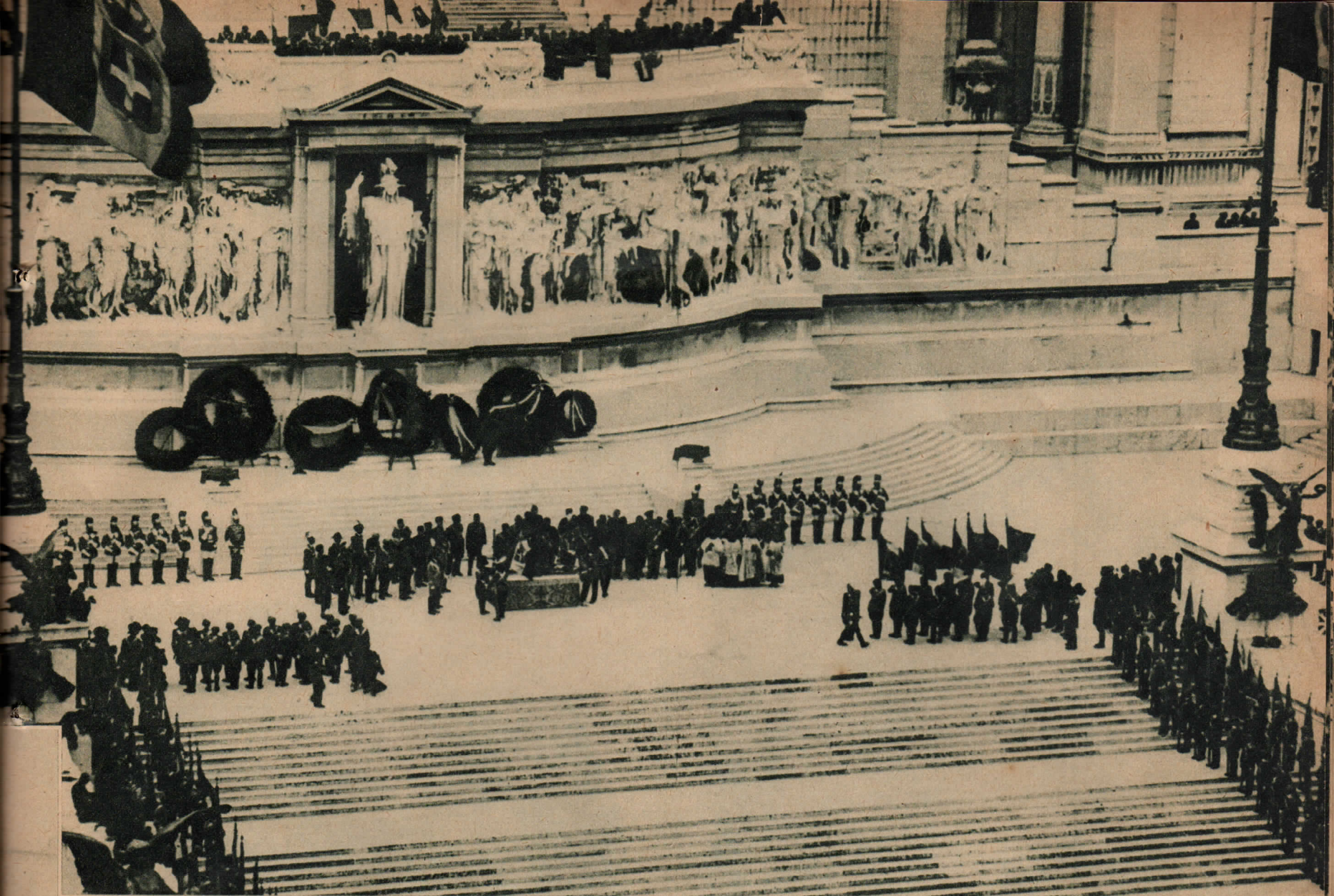
給水タンク運搬車の輸送
（ナポリ港にて）

出發のイタリー砲兵隊

聯隊旗授與式　東阿の風雲急を告げ軍隊多數が増派されたのでその後に新に補充された十九の聯隊に對しイタリー皇帝から聯隊旗を授與された。（寫眞はその授與式の全景）

ローマ出發の黑シャツ隊

東阿遠征の途へ

ローマ驛の雜沓
（東阿遠征に向ふ黒シャツ隊）

遠征のイタリー兵に別れを告げるイタリー少年ファシスト隊員

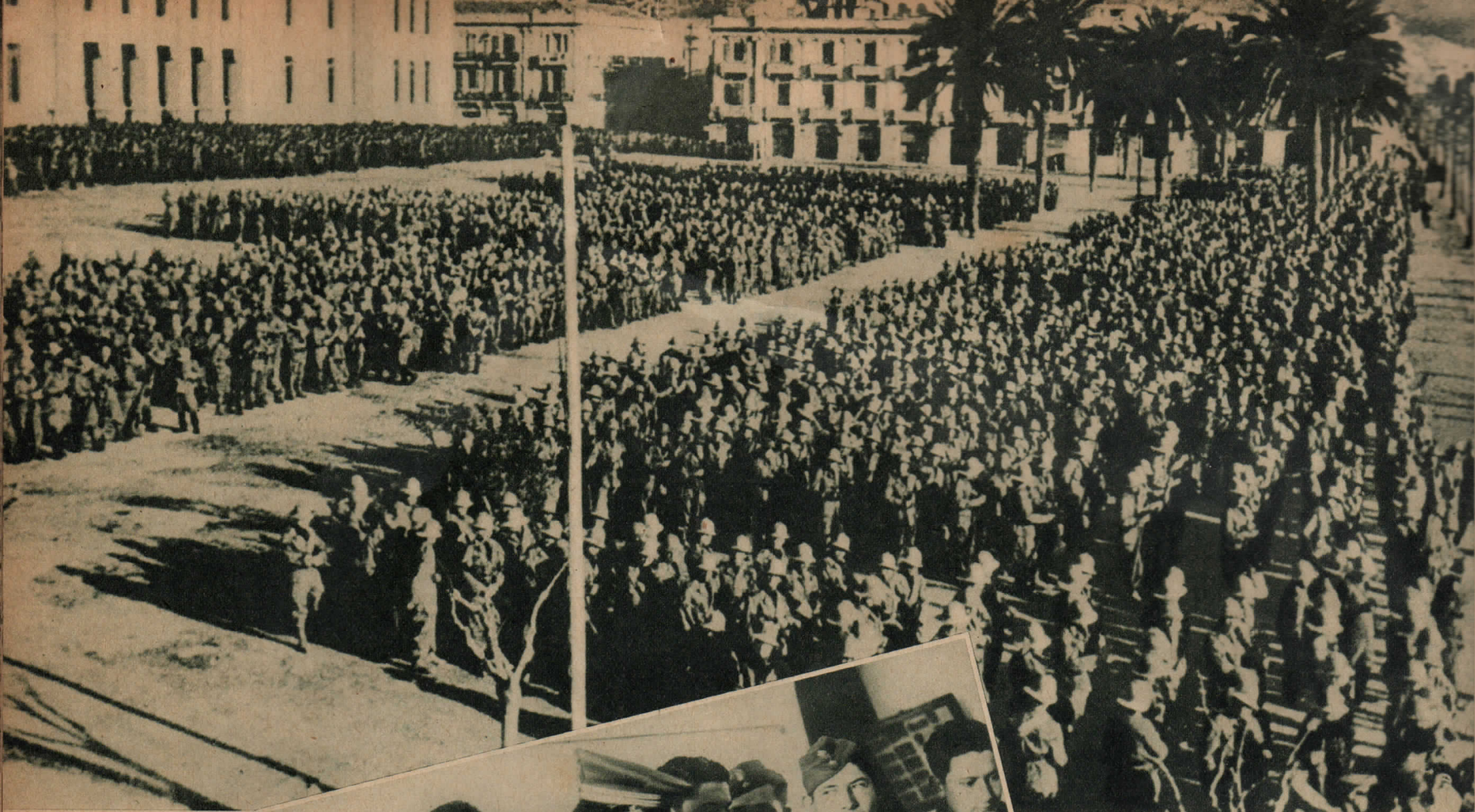
〝さやうならお父さん〟
（ローマ驛頭、伊軍出動風景）

東阿出征增遣隊の示威行進
（ローマのコロシウムを通過）

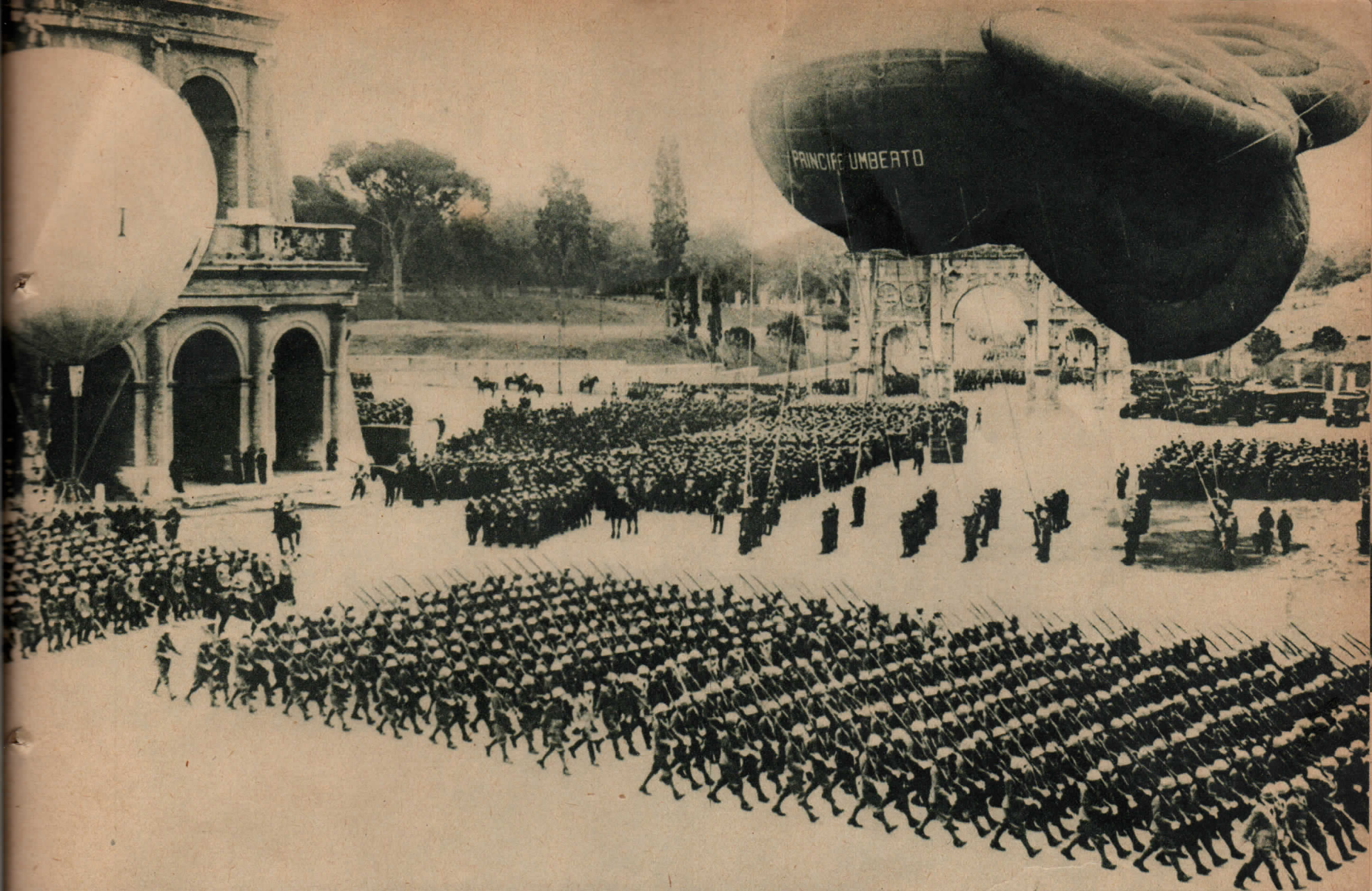
黑シヤツ隊を滿載して
ナポリ港を出發するサツルニア號

〃坊や、たつしやで！〃

伊軍ナポリ港にて乘船、東阿出征地へ!!

シシリー島メシナ港から乗船出動する伊軍

出動命令に緊張の兵士たち（フローレンスの伊軍兵營にて）

熱帶武裝したイタリー兵エボリ出發

イタリーの大示威運動

▲イタリー憲法制定の日を卜して
ローマにおける伊軍の大示威行進

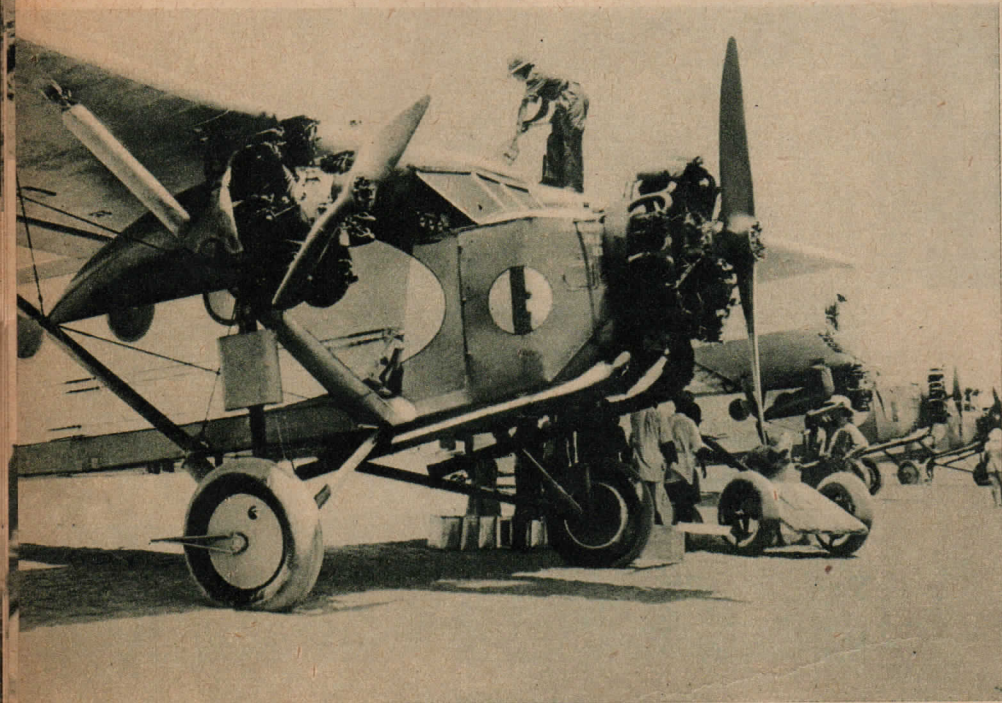
ローマにおける約十萬のファシストの大示威

熱沙の東阿遠征

伊軍大砲のマスコット
（エリトレア國境地方にて）

裸體のイタリー軍
（伊領ソマリーランド到着のイタリー軍、モガデイツシヨにてグラヂアニ將軍の檢閲を受く）

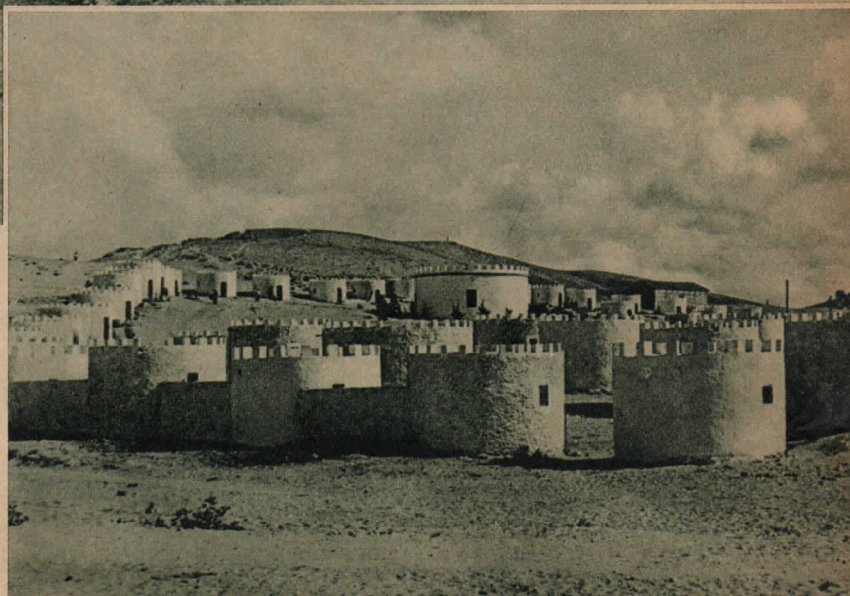
酷熱と水の缺乏にあへぐイタリー兵、各隊に給水

酷熱と戦ひながら自動車路を開くイタリー兵
（イタリー領ソマリーランドにて）

貯水タンクの設備をいそぐ
（水の乏しいエリトレアにてイタリー軍にとつての命の親）

待機のイタリー軍飛行機
（伊領ソマリーランド到着）

東阿出征地にあるイタリー軍の野營

伊領ソマリーランドにおける伊軍歩哨
（周圍に鐵條網をめぐらしてゐる）

前線へ進發するイタリー軍（エリトレアにて）

東阿遠征のイタリー軍兵士たちは連日の行軍と演習の暇をぬすんで故國へ便りが何よりの樂しみ

エリトレアのマッサワ附近にあるイタリー軍の兵營

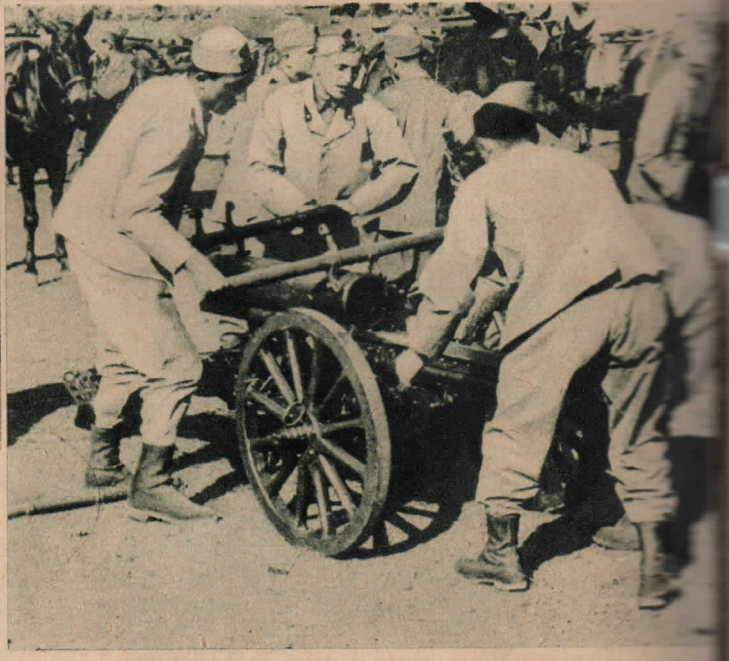
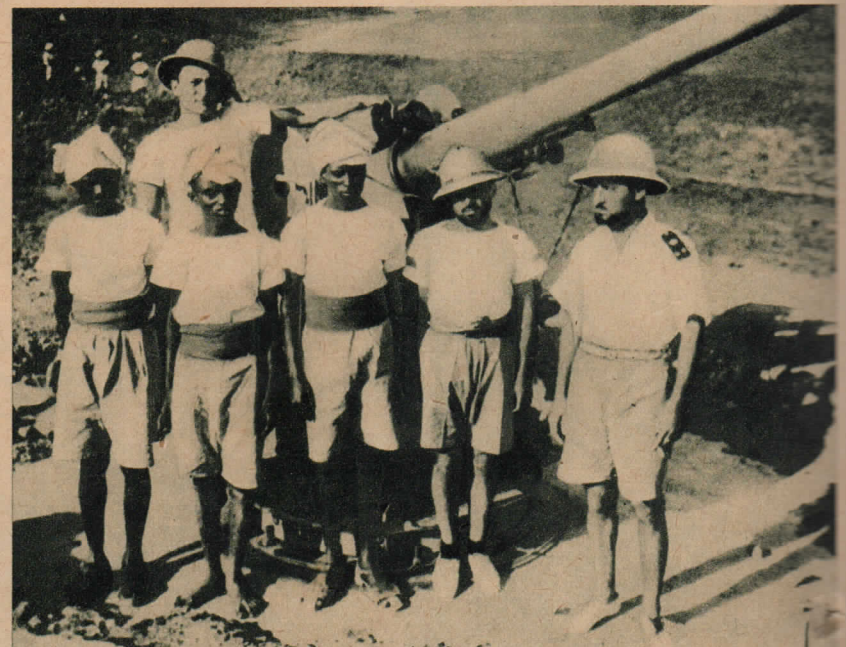
戰ひを前にエリトレアにてイタリー軍の演習

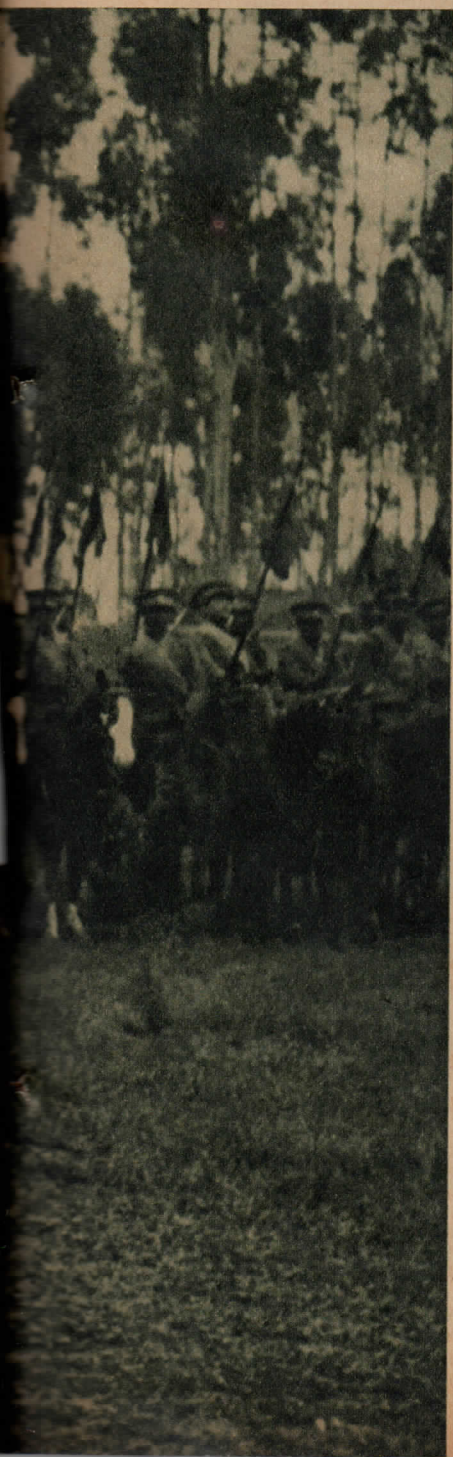
軍需品積上げて混雑するエリトレアのマツサワ港

東阿出征地の要所々に
武器配備を急ぐイタリー軍

戰ひを前にイタリー軍では早くも病人續出して
野戰病院に運ばれるものが多い

大砲を圍んで
イタリー將卒こ土民兵たち
（エリトレア、エチオピア國境にて）

國難來のエチオピア

軍服御正裝のエチオピア皇帝

エチオピア皇帝旗

機關銃を御試射さるゝエチオピア皇帝

御閲兵のエチオピア皇帝

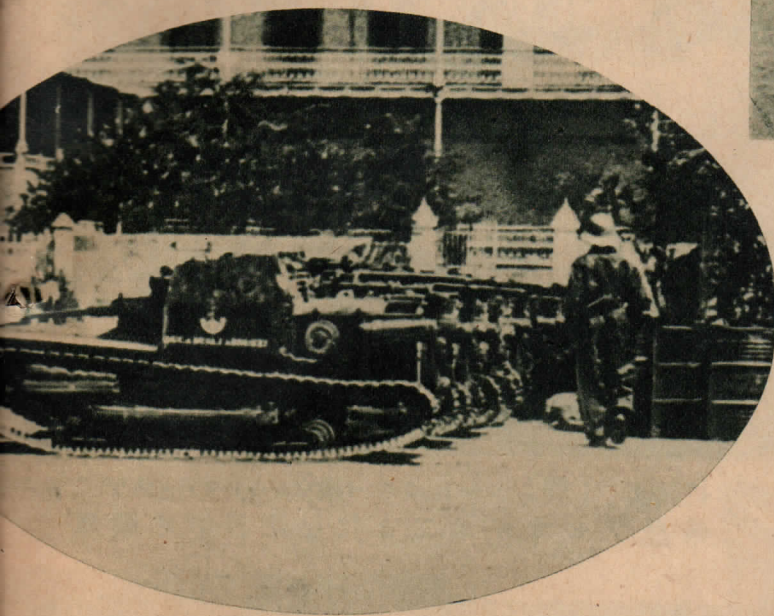
アデス・アベバの宮殿のバルコニーから親しく國民に
激勵の御言葉をたまふエチオピア皇帝

親しく御閲兵のエチオピア皇帝
馬上の御雄姿

エチオピア兵の銃の手入れ

エチオピア近衛騎兵隊

エチオピア皇帝護衛の勇士たち

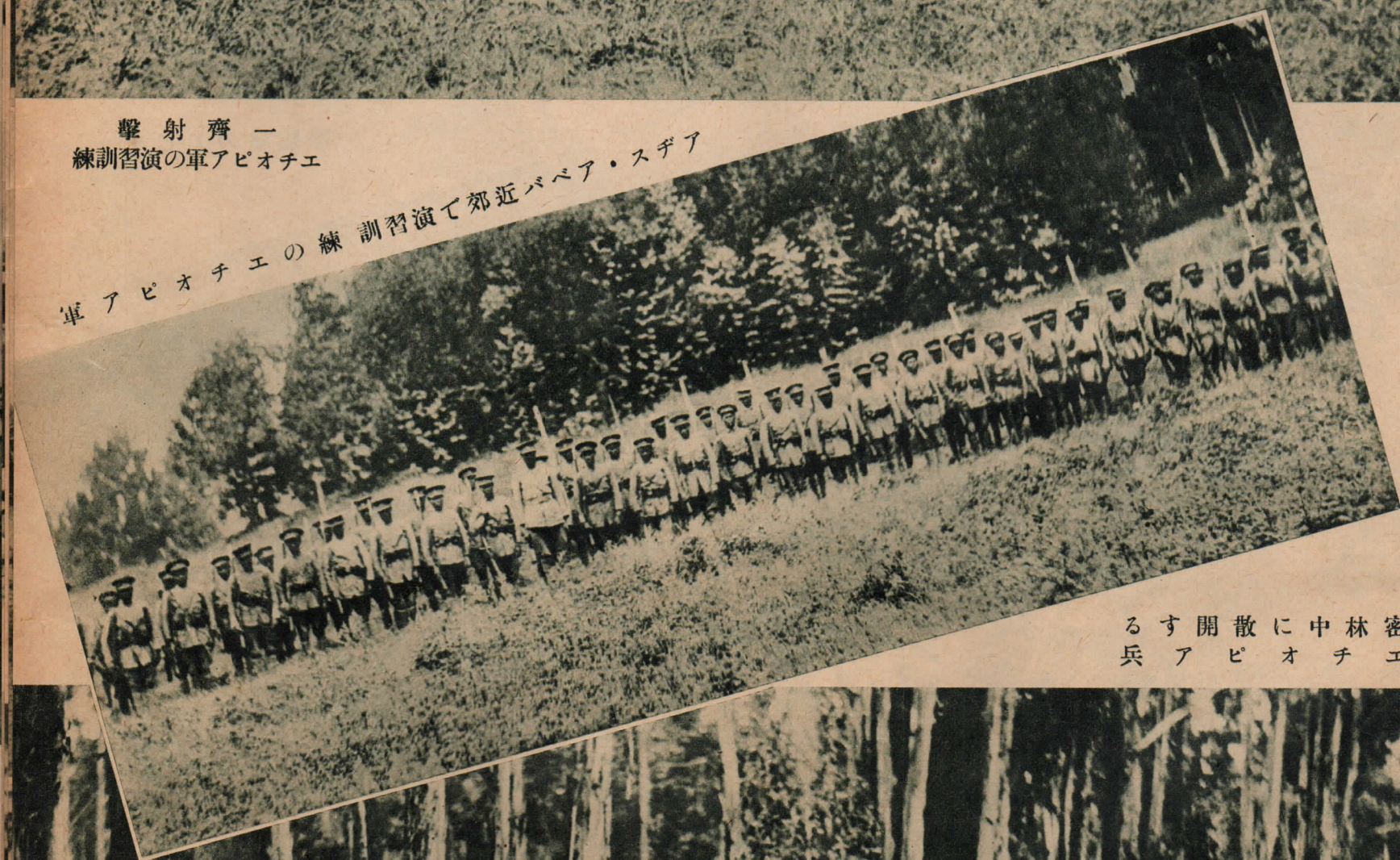
首都アヂス・アベバの政廳前に集つたタンク

空襲にそなへてエチオピア兵の高射機關銃訓練

エチオピアの正規軍親衛隊

一齊射撃
エチオピア軍の演習訓練

アデス・アベバ近郊て演習訓練のエチオピア軍

密林中に散開する
エチオピア兵

エチオピアの駱駝隊

わらぢ靴をはいたエチオピアの將校

エチオピアの砲兵隊

彈藥箱に腰をおろして前線へ出發待機のエチオピア兵

エチオピア國ハラールにあるラヂオ・ステーション

エチオピアの空軍

エチオピアの飛行機

エチオピア軍樂隊
（先頭は身長七尺もある樂長）

頭に彈藥箱をのせて運ぶエチオピア兵

エチオピア軍の軍用品輸送

エチオピア土民軍

軍を指揮する各州知事たち

（エチオピア奥地主としてゴジヤム地方から五千の手兵を率ゐて出馬の各軍指揮にあたる）

近代武器操法に余念のない
エチオピア土民兵

エチオピア土民志願兵の指揮者
（ミカエル氏）

伊領ソマリーランドミエチオピア國境に駐屯のエ國土民兵

エチオピア土民兵出陣の裝ひ

前線出動を待つ土民志願兵

首都アデス・アベバに押し寄せたエチオピア土民志願兵の大會

エチオピア土民志願兵の指揮者（ミカエル氏）

伊領ソマリーランドとエチオピア國境に駐屯のエ國土民兵

エチオピア土民兵出陣の裝ひ

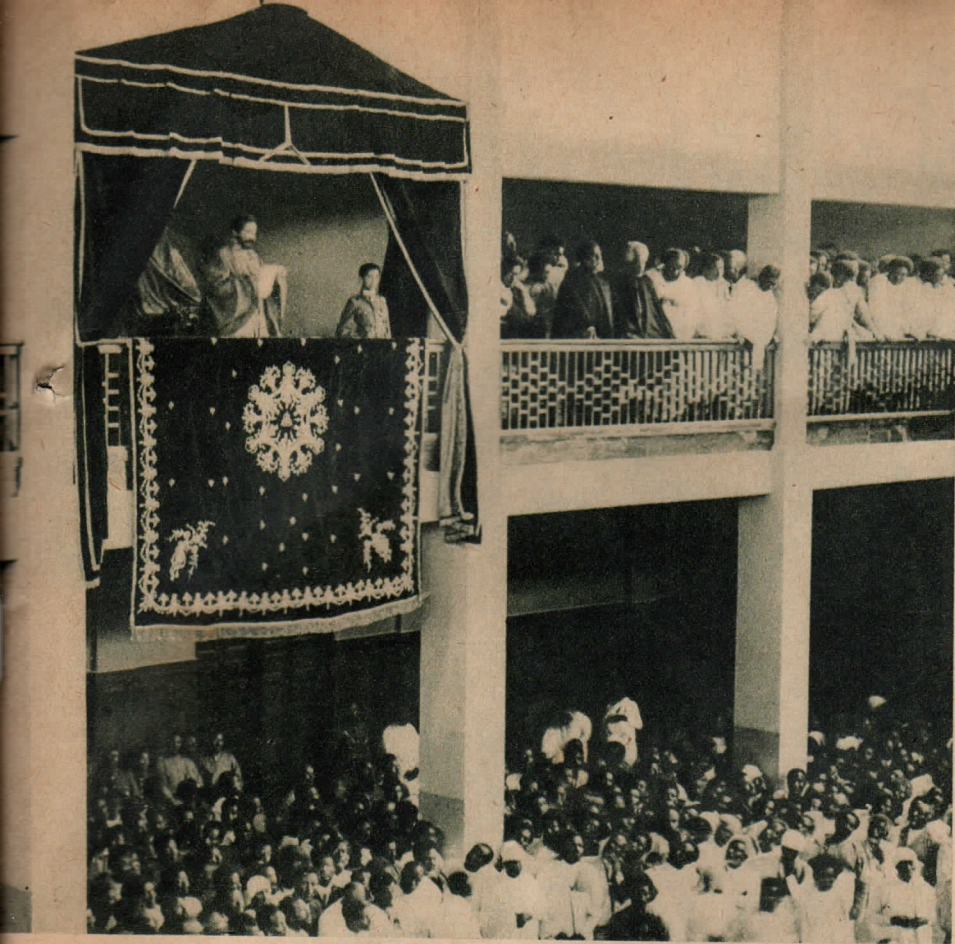
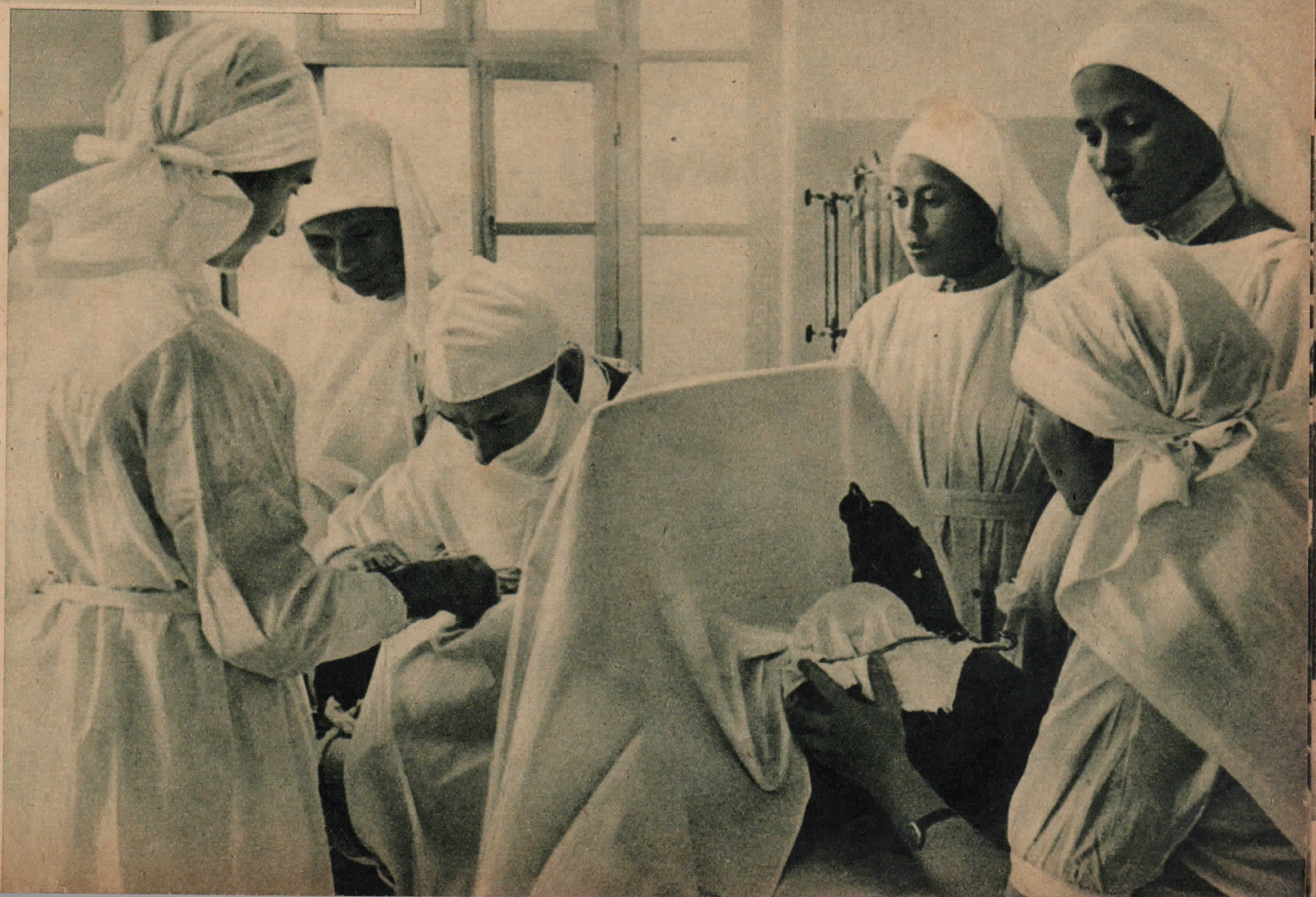
前線出動を待つ土民志願兵

首都アデス・アベバに押し寄せたエチオピア土民志願兵の大會

エチオピア皇后陛下

首都アヂス・アベバに新に設けられた病院.

國難を議する
エ國各州知事

戰勝祈願をする白衣のエチオピア人たち

エ國皇帝、議會において國民を御激勵

國難打開に一致協力を叫ぶ街の愛國者
（首都アヂス・アベバにて）

皇帝に謁見のため首都アヂス・アベバに到着した各州知事

非常時とエ國上流婦人たち
（夫が出征中政府の印刷局に働き祖國のためにつくさんことを申出た）

エチオピア土民志願兵エリトレア國境さして行進

國境守備に出動

軍用列車アヂス・アベバ停車場を出發

エ國兵首都行進

（伊領ソマリーランド國境線へ出動のエ國兵、軍樂隊を先頭に首都アヂス・アベバ市中を行進）

アドワの役で伊軍を撃退した先帝メネリツク王記念像

（エチオピアの首都アヂス・アベバにあり、後方はその記念教會堂）

アヂス・アベバ驛

アヂス・アベバの最も繁華な街

アヂス・アベバの大市

（近郷は勿論遠く二、三百哩の奥地や外國からも商人達が集つてくる）

昭和十年九月三十日印刷
昭和十年十月五日發行
定價一部 金三十錢
發行所 印刷所 大阪市北區中之島三丁目三番地 株式會社朝日新聞社
編輯兼發行 兼印刷人 大道弘雄
(發賣所) 大阪 東京 朝日新聞社

昭和十年九月三十日印刷
昭和十年十月五日發行
定價一部 金三十錢
發行所 印刷所 大阪市北區中之島三丁目三番地 株式會社 朝日新聞社
編輯兼發行人 兼印刷人 大道弘雄
（發賣所） 大阪 東京 朝日新聞社